

生徒の意欲を高める指導の在り方に関する一考察 —工業高校における意識調査を手がかりとして—

A Study on How the Instruction Should Be Done to Motivate Students: Referring to Research Carried out in Technical High School

黒 岩 寛* 當 山 清 実**
KUROIWA Hiroshi TOYAMA Kiyosane

本研究の目的は、工業高校の生徒の学校生活に関する意識と教員の課題意識に着目し、生徒と教員の関係性を明らかにすることで、工業高校における学習指導及び生徒指導の一助となる知見を得ることである。兵庫県内全ての工業高校における生徒及び教員に対するアンケート調査を実施した結果、教員や地域から認められないことによる生徒の自己肯定感の低さが確認できた。また、生徒が授業に望むことと、教員が感じている学習に対する課題意識の差異が確認できた。さらに、教員間の協働・連携の不足により組織的な授業改善を進めることができず、生徒の授業理解と学校生活の充実に影響を与えていることが明らかとなった。この調査結果を踏まえて、生徒の学校生活に対する意欲を高める指導の在り方について考究した。

キーワード：工業高校、自己肯定感、生徒と教員の関係性、指導観の転換、授業改善

1 研究の背景と目的

本研究の目的は、兵庫県内の工業系学科を設置する高等学校（以下、工業高校）に在籍する最上級生徒（以下、生徒）が持つ学校生活に関する意識と工業高校に勤務する教員（以下、教員）が持つ課題意識に関する調査を行い、学校生活の中での学習、級友及び教員との関係性に加えて、教員が感じている学校及び生徒の課題、授業力を高めるための取り組みを明らかにすることで、今後の工業高校における学習指導・生徒指導の一助となる知見を得ることである。

兵庫県の人口は、2010年をピークに減少を始め、2015年以降は5年で約15万人ずつ急激に減少していくと予想されている¹⁾。県内産業を支える15～64歳の生産年齢人口も大きく減少してきており²⁾、労働力不足による生産力の低下と購買力の中心層の減少による消費力の低下が兵庫県経済を減退させると危惧されている。このため兵庫県の工業教育は、地域で活躍できる職業人の育成に力を注いでおり³⁾、工業高校には地元企業への就職、地元産業を支える技術・技能の習得、ものづくりを通して地域社会へ貢献する人材の育成が期待されている。

これまで工業高校は、ものづくりの技術・技能を持った専門的職業人を育成し、多くの人材を地域産業に送り出してきた。しかし、技術革新の進展による高度化・複雑化した産業構造の変化に、工業高校の専門教育は追従できなくなってきた。新しい時代・社会に向けて、専門的職業人として求められる資質・能力が多様化する中で、これからの工業教育の在り方が模索されている。次代を担う人材を育て、地域産業に寄与していくための工業教育を俯瞰すると、教員の指示通りに動く規律・規範を教えることに偏った従来の指導では、求められる資

質・能力の育成は難しく、今後の工業高校における指導の在り方を検討していかなければならない。

工業高校での学校生活に関する先行研究は、進路選択と学校生活における生徒の意識に関する研究（中原ら2016）、工業高校生の学校生活とキャリア意識に関する研究（尾川2015）など、生徒の進路意識に関する研究が行われてきた。また、授業に関する先行研究は、教科ごとの授業実践における事例研究を中心としたものが多く、情報系授業での実践と結果から学習効果を計る研究（西野ら2007）、ジグソー法による授業事例研究（日高2016）、授業の中で問題解決に向けての意欲を高める研究（佐藤2004）などが行われてきた。さらに、工業高校の教員に関する先行研究として、教員研修の支援に関する研究（田幡ら2012）、工業科教員の養成の現状と課題に関する研究（伊藤2001）、新しい時代に対応する工業科教員としての素養育成のための研究（山本2016）などが蓄積されているが、工業高校に勤務する教員の課題意識に関する研究は少ない現状にある。

本稿は以上の先行研究を踏まえ、生徒の学校生活に関する意識と教員の課題意識に着目し、生徒と教員の関係性と学習に対する意識の差異を確認するとともに、生徒の授業理解と学校生活に影響を与えている要因を明らかにすることで、生徒の学校生活に対する意欲を高める指導の在り方について考究する。

2 調査の概要

- （1）調査時期：2017年6月～7月（一部9月）
- （2）調査対象：兵庫県内の工業高校20校に在籍する生徒及び教員を調査対象とした。
- （3）調査項目：生徒に対する調査項目として、「A1

*兵庫県立神崎工業高等学校

平成30年7月4日受理

**兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻学校経営コース 准教授

学校生活について（5件法）」14項目、「A2 授業に対して望むこと（3つ選択）」9項目、「A3 学校で一番嬉しい時（1つ選択）」7項目を設定した。

教員に対する調査項目として、「B1 学校の課題だと感じるもの（3つ選択）」16項目、「B2 生徒の課題だと感じるもの（3つ選択）」12項目、「B3 授業指導力を高めるために取り組んできたこと（2つ以内で選択）」8項目を設定した。

（4）調査方法：兵庫県高等学校教育研究会工業部会教頭会より各工業高校へアンケート用紙を配布し実施した。

（5）回収状況：生徒3308名、教員946名から回答を得た。

3 結果と考察

（1）生徒の学校生活に関する意識

表1は、生徒の学校生活と学習に関する意識の調査結果である。

まず、「A1 学校生活について（5件法）」では、「あてはまる」と「まああてはまる」を合わせた肯定的回答が最も高い値となったのは「A1-1 クラスは楽しい（肯定的回答83.1%）」であった。2番目に「A1-2 学校に何でも話せる友人がいる（肯定的回答79.1%）」、3番目に「A1-3 学校生活は充実している（肯定的回答78.6%）」、4番目に「A1-4 本校に入学して良かった（肯定的回答77.8%）」、5番目に「A1-5 学校の勉強は将来の役に立つ（肯定的回答71.2%）」という結果となった。

他方、「あてはまらない」と「あまりあてはまらない」を合わせた否定的回答を下線で表示した。否定的回答が最も高い値となったのは「A1-14 近隣の住民から学校は好感を持たれている（否定的回答39.6%）」であった。2番目に「A1-12 先生から認められることがある（否定的回答29.8%）」、3番目に「A1-13 クラスの仲間の役に立っている（否定的回答29.4%）」、4番目に「A1-11 授業が良くわかる（否定的回答19.9%）」、5番目に「A1-8 学校に自分の落ち着く場所がある（否定的回答16.9%）」という結果となった。

次に、「A2 授業に対して望むこと（3つ選択）」では、「A2-1 社会に出てから役立つことを教えて欲しい（55.6%）」が最も高い値であった。2番目に「A2-2 授業の内容をわかりやすく教えて欲しい（45.3%）」、3番目に「A2-3 将来の生き方について、もっと教えて欲しい（36.4%）」という結果となった。

さらに、「A3 学校で一番嬉しいとき（1つ選択）」では、「A3-1 実習で技術が身に付いたとき（21.9%）」が最も高い値であった。2番目に「A3-2 部活動で活躍できたとき（20.0%）」、3番目に「A3-3 授業が理解できたとき（16.6%）」という結果となった。

「A1 学校生活について」は、「A1-1 クラスは楽しい（肯定的回答83.1%）」「A1-2 学校に何でも話せる友人がいる（肯定的回答79.1%）」の結果から、級友との人間関係は良好で、学校生活を楽しく過ごしている傾向にあるといえる。また、「A1-3 学校生活は充実している

（肯定的回答78.6%）」「A1-4 本校に入学して良かった（肯定的回答77.8%）」の結果から、生徒の学校生活に対する満足度は高く、充実している状況が明らかとなった。

しかしながら、「A1-13 クラスの仲間の役に立っている（否定的回答29.4%）」の結果からは、クラス全体では楽しいものの、生徒個人はクラスの役に立てていないという自己肯定感の低さがうかがえる。また、「A1-7 信頼できる先生がいる（肯定的回答69.4%）」に対して、「A1-12 先生から認められることがある（否定的回答29.8%）」は非常に低く、教員を信頼してはいるものの、教員から認められていないと感じている生徒が3割近くおり、教員との関係性の低さが生徒の自己肯定感の低さにつながっていると考えられる。

同様に「A1-14 近隣の住民から学校は好感を持たれている（否定的回答39.6%）」と地域から認められていないと感じていることが、生徒の自己肯定感を低くしている一因であると考えられる。また、「A1-12 先生から認められることがある（否定的回答29.8%）」「A1-13 クラスの仲間の役に立っている（否定的回答29.4%）」「A1-8 学校に自分の落ち着く場所がある（否定的回答16.9%）」という生徒個人に関する項目では否定的回答が多く、個々の生徒は学校生活の中での弱さ・不安定感を持っていることが把握できた。

学習面では、「A1-5 学校での勉強は将来の役に立つ（肯定的回答71.2%）」と学校での学習が社会に出てから有用であると感じているが、「A1-10 高校での授業に興味を持てる（否定的回答16.6%）」と2割近くの生徒が授業への興味を持てていない実態が明らかになった。授業理解は「A1-11 授業は良くわかる（否定的回答19.9%）」と2割近くの生徒は授業が理解できていない状況が確認できた。学習への興味・理解が低いにもかかわらず、学校生活は充実しているという相反する結果から、工業高校には義務教育の段階で授業についていけなくなった生徒も少なくないため、勉強への苦手感・劣等感を持ち「自分は勉強ができない」という諦めを自分の中で受け入れてしまっているといえる。その上で、学校生活と学習活動を別物として捉え、授業が理解できなくても学校生活に楽しみを見出していると考えられる。

「A2 授業に対して望むこと」では、「A2-1 社会に出てから役立つことを教えて欲しい（55.6%）」「A2-3 将来の生き方について、もっと教えて欲しい（36.4%）」と実社会に通用する学びを求めている点は、卒業後は就職を希望する生徒が多い工業高校の特徴であるといえる。「A2-2 授業の内容をわかりやすく教えて欲しい（45.3%）」は、授業を理解したいという願望を持っている実情を示しており、生徒の内面には自分の将来や進路実現のために学習は必要であると感じていることが明らかである。「A2-6 わからなくなった勉強に、補習や個別指導をして欲しい（22.6%）」「A2-7 学習の進度や理解に応じ、班やクラスを編成した授業をして欲しい（20.3%）」「A2-8 自分で課題を見つけて学習するような授業をして欲しい（10.3%）」と生徒は自分自身にどのような学び方

表1 生徒アンケート調査結果 [N=3308]

(%)

| A1 学校生活について（無回答を除く） | あてはまる | まああてはまる | どちらともいえない | あまりあてはまらない | あてはまらない |
|-------------------------------------|-------|---------|-----------|-------------|-------------|
| A1-1 クラスは楽しい | 44.3 | 38.8 | 7.2 | 3.7 | 5.1 |
| A1-2 学校に何でも話せる友人がいる | 41.7 | 37.4 | 10.0 | 5.0 | 5.0 |
| A1-3 学校生活は充実している | 31.7 | 46.9 | 11.1 | 4.1 | 5.5 |
| A1-4 本校に入学して良かった | 34.3 | 43.5 | 10.2 | 5.1 | 6.3 |
| A1-5 学校での勉強は将来の役に立つ | 29.2 | 42.0 | 14.8 | 5.2 | 8.0 |
| A1-6 クラスの仲間を信頼している | 25.9 | 44.6 | 13.3 | 6.1 | 9.2 |
| A1-7 信頼できる先生がいる | 30.6 | 38.8 | 14.2 | 6.5 | 9.2 |
| <u>A1-8 学校に自分の落ち着く場所がある</u> | 27.3 | 36.4 | 18.6 | <u>9.6</u> | <u>7.3</u> |
| A1-9 所属学科の授業に興味がある | 24.1 | 38.7 | 20.6 | 8.6 | 7.1 |
| A1-10 高校での授業に興味を持てる | 17.9 | 40.7 | 24.0 | 9.0 | 7.6 |
| <u>A1-11 授業は良くわかる</u> | 10.7 | 44.2 | 24.4 | <u>8.7</u> | <u>11.2</u> |
| <u>A1-12 先生から認められることがある</u> | 13.1 | 33.8 | 22.6 | <u>8.5</u> | <u>21.3</u> |
| <u>A1-13 クラスの仲間の役に立っている</u> | 13.1 | 31.0 | 25.7 | <u>8.5</u> | <u>20.9</u> |
| <u>A1-14 近隣の住民から学校は好感を持たれている</u> | 12.4 | 28.1 | 19.2 | <u>11.4</u> | <u>28.2</u> |
| A2 授業に対して望むこと（3つ選択、無回答を除く） | | | | | |
| A2-1 社会に出てから役立つことを教えて欲しい | | | | 55.6 | |
| A2-2 授業の内容をわかりやすく教えて欲しい | | | | 45.3 | |
| A2-3 将来の生き方について、もっと教えて欲しい | | | | 36.4 | |
| A2-4 もっと興味の持てる教科・科目を設けて欲しい | | | | 35.3 | |
| A2-5 自分の好きな教科・科目を自由に選ばせて欲しい | | | | 33.4 | |
| A2-6 わからなくなった勉強に、補習や個別指導をして欲しい | | | | 22.6 | |
| A2-7 学習の進度や理解に応じ、班やクラスを編成した授業をして欲しい | | | | 20.3 | |
| A2-8 自分で課題を見つけて学習するような授業をして欲しい | | | | 10.3 | |
| A2-9 その他 | | | | 8.9 | |
| A3 学校で一番嬉しいとき（1つ選択、無回答を除く） | | | | | |
| A3-1 実習で技術が身に付いたとき | | | | 21.9 | |
| A3-2 部活動で活躍できたとき | | | | 20.0 | |
| A3-3 授業が理解できたとき | | | | 16.6 | |
| A3-4 その他 | | | | 15.5 | |
| A3-5 行事などで活躍できたとき | | | | 9.9 | |
| A3-6 先生から認められたとき | | | | 7.6 | |
| A3-7 級友から認められたとき | | | | 5.0 | |

が合っているのか理解できずにいると考えられる。

「A3 学校で一番嬉しいとき」の結果からは、上位に「A3-1 実習で技術が身に付いたとき（21.9%）」と「A3-3 授業が理解できたとき（16.6%）」の学習に関する項目が2つ入っている。「A1-10 高校での授業に興味を持てる（肯定的回答48.6%）」と生徒の授業への興味は

高くはないものの、生徒の内面には学習への関心と意欲があることが明らかになった。また、「A3-2 部活動で活躍できたとき（20.0%）」が上位から2番目に位置していることは、部活動が生徒の学校生活の中で主要な部分を占めており、部活動の充実が学校生活全体の充実につながっていると推察される。他方で「A3-6 先生から

認められたとき (7.6%)」「A3-7 級友から認められたとき (5.0%)」と低い結果がでているのは、学校生活の中で他者から認められることが少ないため、生徒の自己肯定感が低くなっていると考えられる。

(2) 教員の課題意識と授業指導力

表2は、教員が感じている学校・生徒の課題意識と授業指導力を高める取り組みに関する調査結果である。「B1 学校の課題だと感じるもの (3つ選択)」では、「B1-1 学力向上 (56.8%)」が最も高い値であった。2番目に「B1-2 生活・生徒指導 (49.5%)」、3番目に「B1-3 部署間の協働・連携 (36.9%)」という結果となった。「B2 生徒の課題だと感じるもの (3つ選択)」では、「B2-1 学習意欲が低い (49.7%)」が最も高い値であった。2番目に「B2-2 家庭学習の習慣がない (41.9%)」、3番目に「B2-3 義務教育の学習が定着していない (37.2%)」という結果となった。「B3 授業指導力を高めるために取り組んできたこと (3つ選択)」では、「B3-1 先輩・同僚から学ぶ (54.5%)」が最も高い値であった。2番目に「B3-2 教育書籍の読書 (30.8%)」、3番目に「B3-3 他の教員の授業を見る (30.2%)」という結果となった。

「B1 学校の課題だと感じるもの」として「B1-1 学力向上 (56.8%)」が最も高い結果となっていることから、教員は生徒の学力の不足と学力向上の必要性を強く感じている。生徒の学力向上を最重要課題として捉えているのに対して、「B1-5 授業改善 (25.3%)」について、教員は自分達の授業に対する課題意識は相対的に低い結果となっている。また、「B1-2 生活・生徒指導 (49.5%)」は、長年にわたる工業高校の課題として共通に意識されている。さらに、「B1-3 部署間の協働・連携 (36.9%)」が学校課題の上位に位置していることは、教員間の協働・連携の不足に危機感を抱いている意識が示されている。

「B2 生徒の課題だと感じるもの」では、学習に関する項目「B2-1 学習意欲が低い (49.7%)」「B2-2 家庭学習の習慣がない (41.9%)」「B2-3 義務教育の学習が定着していない (37.2%)」が上位に位置しており、学校の課題と同様に、教員は生徒の学習に関する意欲や習慣の不足を生徒自身に原因があると捉えている傾向が明らかである。

「B3 授業指導力を高めるために取り組んできたこと」としては、個人的な取り組みである「B3-1 先輩・同僚から学ぶ (54.5%)」「B3-2 教育書籍の読書 (30.8%)」「B3-3 他の教員の授業を見る (30.2%)」「B3-4 自主研修 (講演会・研究会) の参加 (26.4%)」の4つが上位を占めている。組織的な取り組みである「B3-5 校外研修 (20.3%)」「B3-6 校内研修 (授業研究など) (11.0%)」について、教員は有用性を感じていない結果が示された。

4 生徒の学校生活の意識と教員の課題意識に関する分析

(1) 生徒の学校生活の意識に関する分析

生徒アンケート調査結果の相関分析を行い、相関の高

い項目の関係を図1に示した。網掛け表示の「A1-7 信頼できる先生がいる (肯定的回答69.4%)」「A1-8 学校に自分の落ち着く場所がある (肯定的回答63.7%)」「A1-10 高校での授業に興味を持てる (肯定的回答58.6%)」「A1-12 先生から認められることがある (肯定的回答46.9%)」の4項目については、他の項目との相関が多く、影響が大きい項目となっている。

「A1-7 信頼できる先生がいる (肯定的回答69.4%)」は、「A1-1 クラスは楽しい (肯定的回答83.1%)」「A1-3 学校生活は充実している (肯定的回答78.6%)」「A1-8 学校に自分の落ち着く場所がある (肯定的回答63.7%)」「A1-10 高校での授業に興味を持てる (肯定的回答58.6%)」「A1-12 先生から認められることがある (肯定的回答46.9%)」の5項目と相関がある。教員に対する信頼が、学校生活の充実や授業への興味をはじめ、幅広く影響を与えていることが明らかとなった。

「A1-8 学校に自分の落ち着く場所がある (肯定的回答63.7%)」は、「A1-2 学校に何でも話せる友人がいる (肯定的回答79.1%)」「A1-3 学校生活は充実している (肯定的回答78.6%)」「A1-7 信頼できる先生がいる (肯定的回答69.4%)」「A1-10 高校での授業に興味を持てる (肯定的回答58.6%)」「A1-12 先生から認められることがある (肯定的回答46.9%)」の5項目と相関がある。したがって、生徒と教員の関係性が高まれば、教室が生徒の落ち着ける場所となり、授業への興味が高まることが考えられる。

「A1-10 高校での授業に興味を持てる (肯定的回答58.6%)」は、「A1-3 学校生活は充実している (肯定的回答78.6%)」「A1-7 信頼できる先生がいる (肯定的回答69.4%)」「A1-8 学校に自分の落ち着く場所がある (肯定的回答63.7%)」「A1-9 所属学科の授業に興味がある (肯定的回答62.8%)」「A1-11 授業は良くわかる (肯定的回答54.9%)」「A1-12 先生から認められることがある (肯定的回答46.9%)」の6項目と相関がある。したがって、生徒と教員の関係性が高まることによって、学校が生徒の落ち着く場所となり、授業への興味関心が高まり、理解度も高まると考えられる。

「A1-12 先生から認められることがある (肯定的回答46.9%)」は、「A1-6 クラスの仲間を信頼している (肯定的回答70.5%)」「A1-7 信頼できる先生がいる (肯定的回答69.4%)」「A1-8 学校に自分の落ち着く場所がある (肯定的回答63.7%)」「A1-10 高校での授業に興味を持てる (肯定的回答58.6%)」「A1-13 クラスの仲間の役に立っている (肯定的回答44.1%)」「A1-14 近隣の住民から学校は好感を持たれている (肯定的回答40.5%)」の6項目と相関がある。生徒が教員に認められることで授業への興味関心が高まることが期待されるとともに、学校での自分の落ち着く場所、クラスでの級友との関係、近隣地域への意識まで幅広く影響を与えていることが明らかとなった。

これらの相関が多い「A1-7 信頼できる先生がいる (肯定的回答69.4%)」「A1-8 学校に自分の落ち着く場所

表2 教員アンケート調査結果 [N=946]

(%)

B1 学校の課題だと感じるもの（3つ選択、無回答を除く）

| | | | |
|----------------|------|-----------------|------|
| B1-1 学力向上 | 56.8 | B1-9 PR 活動の促進 | 10.7 |
| B1-2 生活・生徒指導 | 49.5 | B1-10 保護者対応 | 8.2 |
| B1-3 部署間の協働・連携 | 36.9 | B1-11 その他 | 7.9 |
| B1-4 業務改善 | 29.1 | B1-12 学校行事の充実 | 7.7 |
| B1-5 授業改善 | 25.3 | B1-13 小・中学校との連携 | 6.4 |
| B1-6 部活動指導 | 17.1 | B1-14 地域との連携 | 6.4 |
| B1-7 会議削減 | 13.6 | B1-15 校内研修体制の充実 | 4.9 |
| B1-8 企業との連携 | 11.4 | B1-16 学校評価の活用 | 1.8 |

B2 生徒の課題だと感じるもの（3つ選択、無回答を除く）

| | | | |
|-----------------------|------|----------------------------|------|
| B2-1 学習意欲が低い | 49.7 | B2-7 コミュニケーションが取りづらい生徒が増えた | 23.6 |
| B2-2 家庭学習の習慣がない | 41.9 | B2-8 生徒指導に手間がかかる | 15.3 |
| B2-3 義務教育の学習が定着していない | 37.2 | B2-9 進路意識が低い | 14.6 |
| B2-4 礼儀・マナー・規範意識が低い | 33.4 | B2-10 その他 | 7.2 |
| B2-5 基本的生活習慣が身に付いていない | 32.5 | B2-11 保護者の協力が得られにくい | 5.9 |
| B2-6 生徒間の学力差が大きい | 30.9 | B2-12 生徒が何を考えているのかわからない | 4.8 |

B3 授業指導力を高めるために取り組んできたこと（2つ以内で選択、無回答を除く）

| | | | |
|-----------------------|------|-------------------|------|
| B3-1 先輩・同僚から学ぶ | 54.5 | B3-5 校外研修 | 20.3 |
| B3-2 教育書籍の読書 | 30.8 | B3-6 校内研修（授業研究など） | 11.0 |
| B3-3 他の教員の授業を見る | 30.2 | B3-7 その他 | 7.2 |
| B3-4 自主研修（講演会・研究会）の参加 | 26.4 | B3-8 特になし | 3.4 |

がある（肯定的回答63.7%）」「A1-10 高校での授業に興味を持てる（肯定的回答58.6%）」「A1-12 先生から認められることがある（肯定的回答46.9%）」の4項目を高めるための働きかけを行うことで、他の項目にも良い影響を与え、生徒の学校生活全般の満足度をより高めることができるかと推察される。

（2）教員の課題意識に関する分析

教員は生徒の学習を大きな課題と意識しているが、生徒の学力や学習意欲の低さを生徒自身の責任として捉える傾向にある。他方、授業がわからない生徒が2割近く存在し、生徒は授業をわかりやすく教えて欲しいと望んでいるが、教員の授業改善に対する意識は相対的に低く、教員は生徒の学力不足に対して授業改善が学校全体の重要課題であるとは捉えていない。このため、生徒の希望と教員の意識の間に差異が生じ、生徒の学習意欲は高まらず、教員も生徒の学力の向上を図れない状態にあると考えられる。

他方、教員から認められていないと感じている生徒は多く、教員との関係性は希薄な傾向にある。生徒の内面には学習への関心と意欲が存在するものの、学習意欲や授業の理解度が低いのは、教員との関係性の低さが一因であるといえる。生徒と教員が接する時間が最も長いのが授業である。生徒と教員の関係性が低いことは、授業内での関係性が低いことと判断できる。この関係性の低

さが、生徒の授業への興味関心や理解度に影響を与えていると考えられる。

高校卒業後すぐに社会へ出る生徒がほとんどの工業高校では、実社会に通じる規律・規範を生徒に身に付けさせることに重きを置いてきた⁴⁾。この伝統的価値観を重視するあまり、授業指導に偏りが起こり、生徒を認め支援する指導が疎かになってしまっている。教員が生徒を認め肯定し、生徒を支援する関係への転換を図ることで、授業が生徒にとって落ち着ける場となっていくと推察される。

教員個々は授業指導力を高めるための活動は行っているものの、校内研修などの組織的な活動が十分には機能しておらず、学校組織として授業改善を進める体制が構築されていない。このことは、意欲があり積極的に授業を改善していこうとする教員と、現状維持の思考の教員との間に大きな格差を生み、学校全体としての授業改善は進まず、結果として生徒の学力向上に結び付かない状態を招いている。

この組織的な活動の機能不全に関しては、教員間の協働・連携の不足にその一因があると考えられる。部署間の協働・連携が学校課題の3番目に位置しているように、実際にその不足が認識されている状況にある。それは教員の個業化を示しており、教育効果を高めるためにも、協働・連携を推進する組織的な働きかけが重要である。

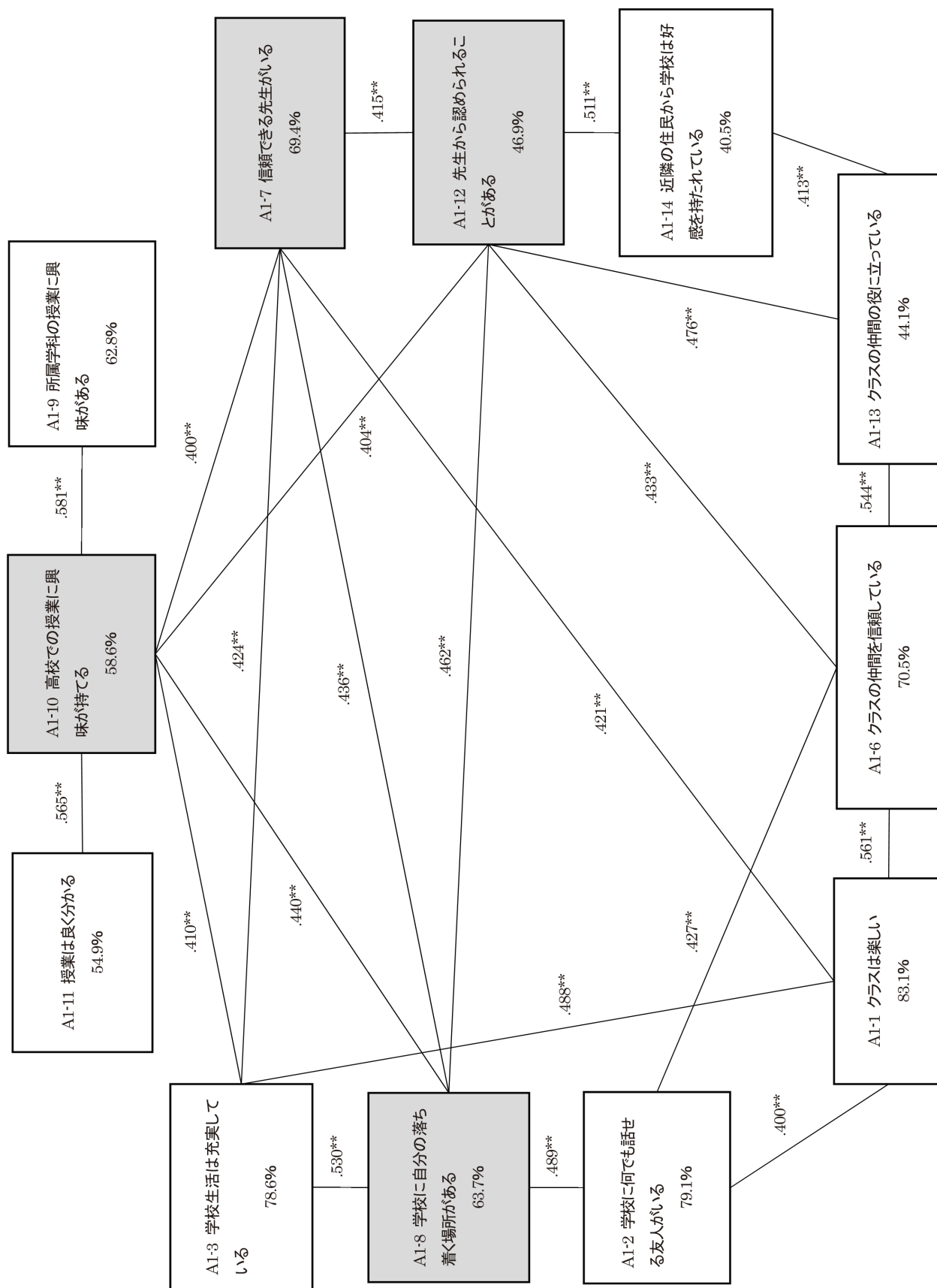


図1 生徒アンケート 相関の高い項目の関係図（肯定的回答）[N=3308]

これまで高校では重視されてこなかった授業研究などの校内研修の機能を高め、実効性のあるものにして、学校組織として教員の授業指導力の向上、授業改善を進める体制を構築する必要がある。

5 本研究の知見と今後の課題

生徒の学校生活と学習意欲を高めるための教員との関係性を基にした指導の在り方について、考察を通じて得られた知見を整理すると以下の点が指摘できる。

第1に、生徒が地域や教員から認められていないと感じている意識が、生徒の自己肯定感を低下させる一因となっている。この自己肯定感の低さが、生徒にとって学校が落ち着ける場所となるかに影響を与えている。生徒の自己肯定感を高めるためには、教員が生徒を認め肯定することが必要である。また、学校を地域に開き、地域から認められる学校となることで、生徒の自己肯定感を高めることが重要である。生徒の自己肯定感の向上により、学校が落ち着く場所となり、学校生活全体の充実度も高まることが期待される。

第2に、生徒が授業をわかりやすく教えて欲しいと求めていることに対して、教員は学習に関する課題は生徒に原因があると考える傾向にある。そのため、自らの授業をよりわかりやすいものへ改善しようという意識は低く、生徒の内面にある学習意欲を引き出せていない実態にある。学習に関する課題は、生徒自身の責任であるという一方的な考え方から脱却し、授業を変えれば生徒も変わるという教員の意識へ改める取り組みが必要である。これまでの規律・規範重視に偏った指導から、生徒を認め支援する指導へ転換を図ることで、生徒と教員のより良い関係性が期待される。

第3に、教員間の協働・連携の不足は、各教員を個業へと追いやり、教育活動で最も重要である授業をよりわかりやすいものにする授業改善の組織的取り組みが進まない現状を招き、授業を理解したいという生徒の希望に応えられず、生徒の学校生活の充実に影響を与えている。協働・連携の視点から校内研修の在り方を見直し、組織的な授業研究に取り組むことで、学校全体の授業改善を図っていくことが求められている。

今後の研究課題としては、教員の協働・連携を高めるためにどのような働きかけが有効かを分析していかなければならない。また、工業高校での生徒の学習への興味・意欲を高める授業研究はどうあるべきか、より具体的な考察が求められる。さらに、生徒と教員の関係性は明らかにできたが、管理職と教員の関係性など学校組織全体での分析・考察も必要である。

注

- 1) 兵庫県 Web ページ 兵庫県将来人口推計について「兵庫県総人口の推移予測」
<https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk07/documents/population-projectionhyogopref.pdf>
(最終閲覧2018年7月1日)

- 2) 兵庫県 Web ページ 兵庫県将来人口推計について「全県（年齢別人口）」
<https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk07/documents/population-projectionhyogopref.pdf>
(最終閲覧2018年7月1日)
- 3) 第2期ひょうご教育創造プランでは、工業教育に関する施策として「キャリア形成の支援・発達段階に応じた体験活動の推進・多様な学習ニーズに対応する高等学校教育の充実」が掲げられている。兵庫県教育委員会 Web ページ「ひょうご教育創造プラン（兵庫県教育基本計画）」
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~kikaku-bo/kihonkeikaku/index2.html> (最終閲覧2018年7月1日)
- 4) 片山(2016)は、「技術者に必要な心構え＝修養的要素を強調する工業教育を『ものづくり規範』と定義している。

参考文献

- 伊藤一雄『工業教員養成の現状と課題：X県 Y 工業高校の工業教員のキャリア調査結果を通して』職業と技術の教育学14巻、2001年、19-31ページ
- 尾川満宏『工業高校生の学校生活とキャリア意識 地域比較を中心に』山口県立大学学術情報8巻、2015年、29-39ページ
- 片山悠樹『「ものづくり」と職業教育－工業高校と仕事のつながり方－』岩波書店、2016年
- 佐藤博『工業高校電気科における課題研究の実践例：過電流防止装置の製作』日本科学教育学会研究会研究報告19巻2号、2004年、33-36ページ
- 田幡憲一、安藤明伸、阿部吉伸『高等学校における教員研修支援に関する実践的研究：石巻工業高校での実践を中心に』宮城教育大学紀要47巻、2012年、323-335ページ
- 中原久志、小山優希、岡部愛子『工業高校生の進路選択及び学校生活に対する意識の実態調査 インテリア科と建築科の比較から』大分大学教育学部研究紀要38巻1号、2016年、103-111ページ
- 西野洋介、田中裕樹、川口貴弘、早川栄一『工業高等学校における OS 学習支援環境の実践と評価』情報処理学会論文誌48巻8号、2007年、2802-2813ページ。
- 日高義浩『知識構成型ジグソー法を取り入れた工業高校での授業事例研究』日本教育情報学会 教育情報研究32巻3号、2016年、31-40ページ
- 山本康詞『新しい時代に対応できるこれからの工業教育－これからの工業教育を担う指導者の育成－』崇城大学紀要41巻、2016年、209-220ページ